慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	報告一：コロナ後に求められる大学
Sub Title	
Author	中村, 伊知哉(Nakamura, Ichiya)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2022
Jtitle	法學研究：法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.95, No.12 (2022. 12) ,p.66- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事：令和四年度慶應法学会シンポジウム：コロナと大学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20221228-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

報告一

コロナ後に求められる大学

中村伊知哉

コロナとウクライナ。人類は二つの戦争の最中にある。コロナは世界が協力して人類の敵に立ち向かう団結の物語であり、世界のデジタル化を一気に進めるなど風景を変えた。そしてウクライナへのロシアの侵攻は、スマホやＳＮＳが普及して初の主要国が関わる戦争だ。サイバー攻撃、フェイクニュース、デジタル金融制裁。デジタルが主戦場となった人類初の戦争である。コロナと対象的に世界の分断を改めて示した。いずれの戦争も、安全保障や身体・生命のレベルでデジタルを問う。コロナ後、ウクライナ後のデジタル社会設計が重要テーマとなる。

日本のデジタル化の実態

コロナ後、超過死亡率はＧ７で日本だけマイナス、というデータが一時取り沙汰された。海外との比較において、日本はうまく乗り切ろうとしているように見える。ロックダウンもなく、「要請」という空気のような圧力で抑え込む。暴動も起きない。海外にないモデルだ。日本の対応は成功例のレガシーとして残るかもしれない。クールジャパンの新しいネタになるかもしれない。一方、未だ命じられてもいないのに、日本だけマスクをしている。お上が仕切らないのに、民衆が互いを監視して縛る厄介な空気の歴史として刻まれるかもしれない。

それらを上回るレガシーは、デジタル化に遅れをとっていたことが鮮明に認識されたこと。デジタル敗戦である。過去二五年の無策が表面化したものだ。平成元年に世界一位だったＩＭＤ世界競争力ランキング

が三四位に落ちた。主要国の中で一方的に下がっているのは日本だけで、三〇年で三四ダウン。没落である。ＤＸの遅れが没落に直結しているのではないか。

かねてから日本のＩＴ利用の弱みは医療・教育・行政＝公益部門に経営だと指摘されてきた。医者・先生・役人と社長がネックだった。デジタル対応が遅く、給付金の交付、遠隔授業などに支障をみせた。在宅勤務が可能な人の割合は主要国で最低水準だ。この公益と経営は、昭和の勝ち組である。世界に冠たる日本の医療、世界に誇る日本の経営。その成功体験が、デジタルで根こそぎ変わることを拒んだ。昭和世代がデジタルを理解できなかった。

途上国以下だった教育デジタル化はコロナ経済対策で一気に前倒しとなり、あと二五年かかる計算だった子供ＰＣ一人一台が一年で実現した。ただ、先生方とＰＣの機能の相談をすると、それよりもっといいＦＡＸがほしい、と真顔で言われる。医療現場もＦＡＸ文化で、コロナの給付金対応はそれで遅れた。五月に山口県で新型コロナ給付金四六三〇万円を間違って給付した事件があった。役所と銀行のデータをフロッピーでやりとりしていたからという。これが日本のデジタル化の実態である。

コロナは何を変えたのか

コロナ後はどうなるのか。数千年かけて人類は都市化を進めてきた。文明は都市の歴史だ。集中・集積がテーマだった。住民は城壁で身を守った。ところが、だから壁の中で一四世紀のペストは蔓延した。戦争も核兵器も、対立を引き起こす宗教も、経済の恐慌も、みな文明が生む。それで死ぬのは自業自得。人類にとっての敵は自然災害であり、病原菌だ。いずれも都市に集中することで、自らの命を縮める可能性がある。一四世紀のペスト。これで教会と領主の権威が下がり、民衆が強くなって、生まれたのがルネサンスだとされる。芸術と科学が生まれた。中世が去って近代が来た。では、コロナが再生するものは何か。

都市集中をひっくり返す手段がＩＴと交通だった。二〇世紀後半から今世紀にかけて、高度情報社会と高度移動社会が構築された。いつでもどこでもコミュニケーションがとれ、いつどこへでも移動できる手段を手にした。都市を離れ田園で優雅に過ごす展望を得た。で、どうなった？　都市集中は一層進む。東京は一九

八〇年から四〇年で二〇〇万人増を見せ、特に中心部に集まった。ＩＴと交通が発達したらコミュニティはより濃いコミュニケーションを求め接近したがった。地方分散？　テクノロジーは逆方向に作用した。

コロナはそれに対する鉄槌だ。テクノロジーで身を守れ。「集中で密」が招いた感染。それを防ぐため、ＩＴで「分散で疎」を心がける。コロナ後、それが定着するだろうか？　数千年かけて築いた都市文明に別れを告げて、のどかな田園の文明に向かうだろうか？

いや、それは幻想だろう。コロナがガツンと警鐘を鳴らしたからといって、数千年の文明がすぐ逆行するとは思えない。人はまだ集積、都市集中、そしてスマートシティを求めるだろう。

ただし、オンライン率、バーチャル率は高止まりするはずだ。一割程度しかできなかったテレワークは五割程度できるようになるだろう。一割程度しかできなかったデジタル教育もできない大学は潰れる。六％のｅコマース率が中国並みの二〇％に上昇するのも遠くあるまい。リアル＋バーチャルの掛け合わせで、集中と分散を併せ持つ社会が目指される。新しい集中と分散のブレンド、新しい密。そのニュー・ノーマルはぼくらが自ら選び取る、コロナ前より素敵な世界となるはずだ。

ＰＣのデジタルから二五年。スマホのスマートから一〇年。次いでＡＩ／ＩｏＴ／データによる超スマートが来る。ドイツが言う第四次産業革命、軽工業・重工業・情報産業の次の時代。日本政府が言うSociety5.0、狩猟・農耕・工業・情報に次ぐ第五の文明。一〇年後には本格化しているだろう。ＡＩ・ロボットが仕事を奪う。仕事を奪っても、ぼくらの取り分が変わらなければ、ヒマになる。うんと奪ってくれれば、超ヒマになる。そうなってもらいたい。創造的な超ヒマつぶしをしよう。そう考えて「超ヒマ社会をつくる」という本を書いた次第である。

企業との連携で広がる大学の可能性

この未来に向けて私は今ｉＵという大学を作っている。情報つまりＩＴ、経営つまりビジネスで、イノベーション革新を起こすプロ・専門職を育てる。正式名は「情報経営イノベーション専門職大学」という日本一長い名前をもつ。が、長すぎて覚えてもらえないので、ｉＵと呼んでいる。二〇二〇年に開学した。

グーグルやYahoo!はスタンフォード大学が生み、フェイスブックはハーバード大のコミュニティから生まれた。大学がプラットフォームとなって育てた。Walkman、ファミコン、ポケモン、初音ミク。日本もこの分野で素敵なものを生んだが、大学が作ったものはない。日本は産官学の学が問題だ。

そういう場を日本に作りたいと考え私が大学院ＫＭＤ（慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科）を作るプロジェクトに参画したのが二〇〇六年。ＫＭＤは国際的でハイエンドな大学院に成長したが、さらに必要なのは、閉塞する日本を破るもっと若い、暴れん坊の集まる学校。産業界と連携した、プロジェクトベースで学び即戦力を生む機関。ＫＭＤの知見を活かしスタートした。

ｉＵの特徴を紹介する。教員の八割が産業界出身。ＩＴとビジネスの科目はＩＴビジネスのプロが教える。それでも全く足りないので、客員教授を五〇〇人アサインしている。一〇〇〇人まで増やす。学生は一学年二〇〇人なので、学生より教授のほうが多い大学だ。企業とも強く組む。連携企業は五〇〇社。一〇〇〇社を超えるだろう。学生は全員四か月インターンを必修としている。

そして「全員起業」。学生全員が四年間に全員起業する。世界初だろう。全員が起業に成功したら、就職率はゼロ。就職率ゼロを目指す。ただ、実際は九割がた失敗するだろう。学生の間に失敗しておこう。失敗から学ぶ失敗大学。

本キャンパスは東京都墨田区。そしてサテライトを東京ベイエリア竹芝地区に置いた。竹芝ではＫＭＤのプロジェクトとして、放送、通信、ＩＴ、音楽、アニメなどの企業五〇社も参加して産学連携拠点・スマートシティづくりを一〇年がかりで進め、二〇年九月に街開きした。既にさまざまなロボットやＡＩ、センサーなどが働いている。世界最先端のスマート地区だ。中核となるビルの上の階にはソフトバンク本社が入居し、この場所をｉＵとＫＭＤで共同利用している。

開学後、作ったものが二つある。一つが研究所「BLab」。「おもしろい未来をみんなでつくる」ラボ。研究所といっても、研究室で試験管を振るようなアカデミズムの拠点ではなく、世界中の研究所、地域、人材をつなぐ参加型のプラットフォーム。一〇〇箇所の拠点、一〇〇万人の研究員を目指す。

もう一つが、メディア。「すみだ MediaLab」。ｉＵ本キャンパスの敷地内に映像スタジオを構え、三月に開局した「ＢＳよしもと」が本拠地として番組制作・発信を毎日行う。地方創生に特化した放送局で、ｉＵのコンセプトを応用し、全番組を起業させるビジネスモデルとしている。大学とテレビ局を融合させて、大学がメディアになる。教育＝ｉＵ、研究＝Ｂ Lab、メディア＝ MediaLab。この三本柱で新しいものを生んでいく。

年齢や国籍にとらわれない大学教育

世界の教育がガラリと変わる。変えよう。スコット・ギャロウェイ著『ＧＡＦＡネクストステージ』は、一〇年後には五〇％の大学が廃校になると喝破する。ＧＡＦＡのほうが大学より大学らしいサービスが提供できるという。既にそれは現実でもある。例えば MOOCs で、コンピュータはＭＩＴ、経営学はスタンフォード、哲学はオックスフォード、東洋史は北京大、それを受講したブロックチェーン学習履歴のリストのほうが慶應の卒業証書より値打ちが出る。それでも行きたい大学の価値をプロデュースしなければならない。それには座学以外の、コミュニティの魅力をギュッと詰め込む必要があろう。

学ぶ人の層も変わる。高校を出て目的意識なく大学に入り社会に出る。それよりも、いったん働いてからのほうが何を学ぶか明確になる。高卒→仕事→大学のパスが太くてもよい。二〇年ぐらいかけて大学と社会を出入りしながら卒業、という設計。人生一〇〇年。定年後三〇年。学ぶ人は増える。大学はシニアが主体になる。そういう設計も重要だろう。そして日本は吹きこぼれをうまく扱えていない。ｉＵには一二歳の客員教授がいる。世界的なドラマーで、音楽を教えてもらっている。でも彼女は中学進学に当たり日本の学校に見切りをつけ渡米した。そういう子の受け皿にもなりたい。

国の壁も壊す必要がある。ハーバードやスタンフォードより難関とされる「ミネルバ大学」。構想はｉＵと似ているが、校舎を持たず、四年間で世界七都市を回り、オンラインで学ぶという柔軟な設計は日本では不可能だ。日本の大学が国際競争力をつけ、海外から頭脳や才能を引き寄せる磁場となるには、制度設計も必要だ。一〇年後五〇％廃校という予測は自分ご

との警句としてとらえ、アクションを起こす必要があろう。iUは一つのモデルとなるべくチャレンジを続けたい。